●論文●

障害学生支援の視点と課題

大泉 溥
（日本福祉大学教授・障害学生支援センター長）

はじめに

日本の大学は一八歳人口の激減により二〇〇七年度には入学定員総数と受験生総数とが同じになり「大学全入時代」に突入するという。また、すでに国立大学も法人化に踏み出している。そういった時代状況において、大学間の生き残り競争が激化し、また研究も巨大プロジェクト化する一方で、授業のIT化が進み、現場実習やフィールドワークが重視され、出口評価への社会的関心も強まってきた。こうした大学の変化が、かえって、障害者のみならず、留学生や低学力学生などさまざまな「教育弱者」の問題を無視ないし放置できなくさせているのかもしれない。

全国に四、〇〇〇名以上といわれる障害学生（身体障害約二、三〇〇名のほかに、発達障害や精神障害の学生を含む）の問題への対処はもう従来のように、「例外的な存在」として一部の関係者に任せておけばよい「特殊な問題」ではなくて、学び甲斐のある大学づくりの試金石というか、すぐれて戦略的な重要課題となってきているのではないだろうか。

そこで、大学における障害学生の受け入れ問題と修学支援のあり方について、日本福祉大学障害学生支援センターの経験を紹介し、今後の大学のあり方との関係で若干の問題提起を試みることにしたい。

一　障害学生の問題を理解する視点

そもそも、学習弱者をつくらない新しい大学づくりのかたちを「大学教育のユニバーサルデザイン」と呼ぶのだとすれば、そこでは少なくとも、①キャンパス環境の物理的バリアフリー化、②入試や履修・期末試験・就職などの組織的運営にかかわる制度的バリアフリー化、③交通・通信・情報伝達にかかわる情報バリアフリー化、④教職員・学生の態度や価値観、人間関係などの心のバリアフリー化が問題である。その際には、内外の先進事例をモデルとした机上のプランに予算を付ける条件整備優先の考え方だけでなく、もっと実践的で地道な努力が大切だと思う。

たとえ、施設設備や専門家の配置が十分でなくても、実情を率直に示して本人が了解してくれるならまずは受け入れ、実際に直面せざるをえない問題を知り、どうすべきかを、みんなで考えていく。それが出発点であり、支援の原点なのではないか。障害学生の直面する問題に向き合い、ともに取り組むことで、当面実現可能な障壁の軽減・除去という課題が見えてくる。その実現過程で仲間としての育ち合いが生み出される。そうした協同の力がやがては全学的な物理的・情報的・組織的バリアフリーを真に前進させることになっていくのである。

たとえば、障害者専用トイレよりも男女別のトイレの中に障害者も使えるものを作るほうがよい。障害学生の受講困難に配慮して作成された詳細な講義資料や字幕付きビデオ、点字レジュメや板書の音読などが他の学生たちの授業理解にも効果をあげていくことにもなっている。ノートテイクの困難な専門用語や固有名詞、リーディング困難な崩し字の板書や図表は一般の学生たちにとっても分かりにくい場合が少なくなくない。また、障害学生のための授業「障害者スポーツ」がとくに障害のない学生たちにも開放され、障害者スポーツ指導員資格を取得する学生が毎年九〇名にもなっている。さらに、ボランティア養成講座をはじめとする正課および正課外の学習がボランティア登録の促進やボランティア技術の向上を生み出している。学友としての障害学生支援の体験がすぐれて人間的な成長となり、社会的にも信頼される学生の育成になる。

こうして、問題の解決に向けてともに努力することは単に個々の障害学生の利益になるだけではなく、すべての学生にとって学び甲斐のある「大学教育」を生み出していくための実践的アプローチなのである。

二　障害学生支援センターの機能と課題

ところで、近年、障害学生支援の学内体制整備に関心が向けられるようになってきた。それは学内で個別に努力してきたことをもっと組織化して、より効率的体系的に展開していくことが必要だと認められたからであろう。

日本福祉大学の場合には、一九九八年に障害学生支援センターを設置している。その事業目的は、①キャンパスの定期点検と改善の提案、②勉学支援の促進（ノートテイク、手話通訳、ビデオ字幕入れ、テキストや教材の点訳、リーディングサービスなど、地域の障害者支援団体とも連携）、③生活や通学の支援（生活介助や通学支援など、支援費制度やデイサービス施設とも連携）、④障害学生支援の調査研究や他大学との連携などである。この事業目的の達成のためにセンター運営委員会があり、またセンター教員一名と派遣職員二名がローテーションで常駐し、さらに二一名の障害者受講アシスタント（TA＝学生アルバイト）が配置されている。

その六年間の実践経験は「障害学生支援の要は、障害学生とサポートスタッフ、授業担当教員や事務窓口職員とのコーディネートにある」と教えてくれている。

障害学生支援の見地からすれば、障害学生の在籍状況の把握がまず問題となる。たとえば、最近五年間の障害学生在籍数の**表**で注目してほしいのは、（　）の「要支援」学生数の示し方である。

障害学生支援センターの発足以前には、身体障害者手帳の等級に依拠して在籍状況を重度・中等度・軽度といった整理をしていた。だが、支援コーディネートを開始して、障害等級と支援の必要とが必ずしも対応していないことに気づいた（物理的バリアフリー化の進展により、肢体不自由では著しい）。そこで、「支援の必要」という視点から障害学生の在籍状況を示すことにした。この変更は「機能障害」の程度で支援対象を判定するのではなく、キャンパス

表　日本福祉大学における身体障害学生数の推移

年度	障害学生数（要支援）	内訳			
		視覚障害	聴覚障害	肢体不自由	内部疾患
2000	93名（23）	7名（2）	24名（11）	46名（10）	16名（0）
2001	100名（29）	9名（4）	32名（19）	42名（6）	17名（0）
2002	121名（45）	12名（6）	43名（31）	48名（8）	18名（0）
2003	117名（54）	11名（4）	48名（33）	43名（16）	15名（1）
2004	115名（65）	15名（10）	47名（34）	47名（21）	8名（0）

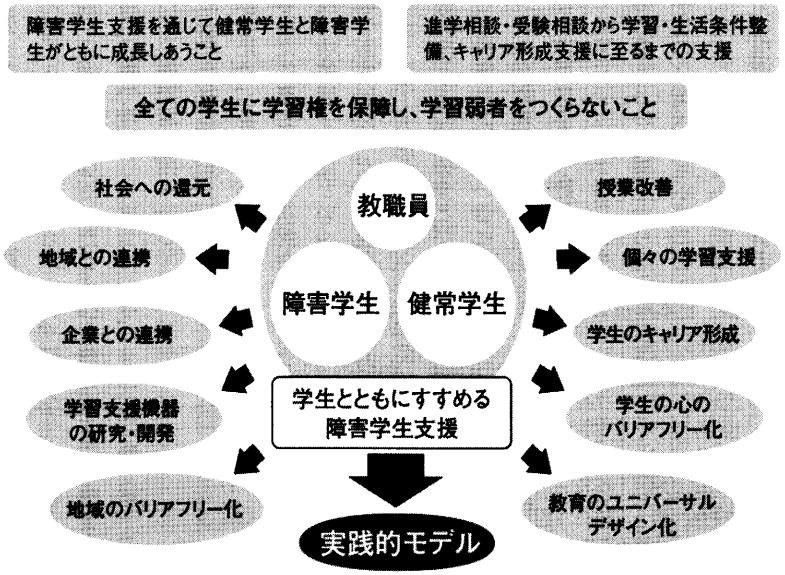
＊（　）の数字は要支援の申請をした障害学生で、内数。
＊上記の他に、通信教育課程には2004年度には57名の身体障害者が在籍している。

環境や教育の実情との関係で障害学生の「特別なニーズ」に注目し、「申し出」を受けて支援のあり方を工夫するほうがずっと有効だということを示している。

ところで、日本福祉大学の支援センターでは申請を受け付けても、そのサポートサービスを直接に提供するとは限らない。障害学生がみずから支援の必要性を学友たちに訴え協力を求める場を提供し、彼らが主体的にgive and takeの関係を発展させていくよう援助してきた（万一の事故などのために大学の経費でボランティア保険に加入し、年度末には支援実績に応じたボランティア奨励金を支給）。この方式は本学開学以来五〇年に及ぶインフォーマル・サポートの伝統を今日的に継承発展させたものである。

障害学生自身の「学びたい」という意欲と「自分にはどんなサポートが必要か」という主体的判断を尊重し、その実現に本人がみずから踏み出すことが重要なのである。また、そうした特別なニーズをもつ学友の問題に気づかないようではどんな学習（学問研究）がありうるのかといった学生一般の学習姿勢、成長課題と直結したものとして大切にしてきた。全学で三〇〇名以上の学生が多様な障害学生支援活動に参加し、学び合い育ち合う関係を育むという意味で、大学の活性化と支援実践のモデルの形成である（図）。

図　日本福祉大学のとりくみの特色



実際、本学のように要支援学生がどの教室でも受講している状況では、障害にかかわる特別なニーズ（受講配慮希望）やそのサポートの実情を無視しては、大学教育が成り立たない。時には、同じ教室に聴覚障害のためノートテイクと視覚障害のためリーディングサービスの両方が実施されている講義もある。そこでは、「何のために、どんなことを、どのように教えるのか」という辛い課題に担当教員は直面させられる。そこでの苦労が一般の受講学生たちにとっても、他の大学とは一味違った「分かりやすく、学び甲斐のある授業」を生み出すことになっている。

このように、まずは問題とまともに向き合い、解決の方途を探ることが大切なのだが、その際に教職員の都合優先とならないよう、障害学生本人やそのサポート学生も参加する必要がある。障害学生を単なる支援サービスの受け手にすぎない存在と見なすのではなく、「障害学生とともに」支援のあり方を模索し探求していく。そうしないと、障害学生は教室の中で特別視され、孤立してしまうことになりかねない。そうした点にも留意して、障害学生を支え励ますことも、支援コーディネーターの重要な役割だと言えよう。実践の事実に即して「学習弱者」を生み出さないような「大学教育のユニバーサルデザイン」を追求していくことが求められているのである。

おわりに

以上、日本福祉大学の経験をもとに、障害学生支援の基本的な視点と支援の課題について述べてきた。その結論は、①自分たちの大学における内的資源を開発し活用すること、②それを主体的にになう支援学生の力量発揮のためにも、コーディネートに専念するスタッフの確保が不可欠であること、③何よりも障害学生のエンパワーメントが肝要であること、という三点である。

【文献】
①大泉溥「大学での障害学生支援のコーディネーター」『教育と医学』第五一巻一二号（二〇〇三）
②大泉溥「日本福祉大学における障害学生支援」『リハビリテーション研究』第一二二号（二〇〇五）
③大泉溥「障害学生の人間的自立」、同著『実践記録論への展開』三学出版（二〇〇五）の第六章
④佐野眞理子・吉原正治編『高等教育のユニバーサルデザイン化』大学教育出版（二〇〇四）